九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

古墳時代開始前後における西北九州地域の鏡とその変遷

辻田, 淳一郎
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

https://doi.org/10.15017/4372119

出版情報：史淵. 158, pp.49-76, 2021-03-07. Graduate School of Humanities, Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

古墳時代開始前後における
西北九州地域の鏡とその変遷

辻　田　淳一郎

1．はじめに

本稿でいう西北九州地域とは、現在の佐賀県唐津市周辺から長崎県北部にかけての地域を指す。本稿では、こうした西北九州地域の中でも唐津湾沿岸地域を中心として、古墳時代開始前後における広域的な地域間関係の変遷について、主に中国鏡の流入・流通という観点から検討を行う。唐津湾沿岸地域は、『魏志』倭人伝にいうところの「末盧国」に対比されており（岡崎編1982；伊都国歴史博物館編2020）、弥生時代終末期～古墳時代初頭前後はまさにこの『魏志』倭人伝の時代にあたる。この地域では、2000年代以降に西九州自動車道建設に伴い多くの遺跡が調査された結果、当該時期における地域間交流を考える上での重要な成果が上げられている。これまで筆者は、中国鏡の流入・流通形態という観点から古墳時代開始前後の地域間関係とその変遷について検討を行ってきたが（例：辻田2019）、西北九州を含む北部九州地域は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて中国鏡の副葬が継続して行われる地域であり、それらの中国鏡の流入形態の時期的変遷を考える上でも重要な地域である。本稿では、特に唐津湾沿岸地域における遺跡出土鏡の分析から、古墳時代開始前後における鏡の流入・流通形態の変遷について検討したい。

２．問題の所在

(1)　古墳時代開始前後の中国鏡の流通形態をめぐる諸問題

本稿が主として対象とするのは弥生時代後期後半から古墳時代前期前半であり、実年代でいえば紀元後２世紀代から３世紀代にあたる。中国でいえば後漢代後半から三国・西晋代にあたる時期であり、この時期に中国で生産された後漢鏡・三国鏡・西晋鏡が日本列島にも多数流入している。このうち、主に三国・西晋鏡は古墳時代初頭以降に出土すること、また三角縁神獣鏡の初期型式の成立が239年・240年前後と考えられることから、古墳時代の開始年代を３世紀第２四半期以降とする見解が一般化している（福永1996；森下1998）。そしてこれらの三国・西晋鏡および三角縁神獣鏡については、近畿地域が列島への流入・列島内での流通の核となり、近畿地域から鏡が流通するようになることを示すものと考えられてきた（福永他2003）。

他方で、後漢鏡については、大陸・朝鮮半島に近い北部九州などでは、弥生時代後期の遺跡からの出土がみられるため、リアルタイムでの舶載・副葬が行われたと考えられるのに対し、瀬戸内以東や近畿地域では完形後漢鏡の弥生時代遺跡からの出土事例が少なく、前期古墳からの出土が大半である。このため、特に近畿地域周辺の前期古墳から出土する完形後漢鏡については、弥生時代後期の時点で流入したものが古墳時代まで長期保有（「伝世」）されたか、あるいは三国鏡・三角縁神獣鏡と同様に古墳時代初頭以降に列島・近畿地域に流入したものかという点について、意見が分かれている。前者はいわゆる「伝世鏡」論の立場であり、近畿地域における古墳時代以降の中心性発現の重要な論拠の一つとされてきた（例：岡村1999；福永2005）。

筆者はこれに対して、後者の立場から、中国鏡の「破鏡」と「完形鏡」の使用形態の違いおよび弥生時代後期と古墳時代前期の出土遺跡の時期の違いに注目してこれまで検討を行ってきた。「破鏡」は、中国鏡の鏡片について、破断面を研磨したり穿孔して垂飾品などとして用いられたものである。筆者は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて出土する後漢鏡のうち、弥生時代後期の完

形鏡および破鏡のいずれも北部九州を起点とした地理勾配を示すのに対し、前期古墳から出土する完形後漢鏡の各鏡式が近畿地域を中心に分布し、またそれらの大型鏡が近畿周辺に集中することを指摘した。その上で、これらの完形後漢鏡は、三国鏡・西晋鏡・三角縁神獣鏡と同様に、古墳時代初頭以降に近畿地域を核として流通したものと考えている。すなわち、完形中国鏡の流通形態が古墳時代初頭前後を大きな画期として、近畿地域を核とする形へと変化したとする見方である（辻田2001・2005・2007）。こうした理解については、その後各地の状況から同様の見解を示す研究者が増えつつある（例：下垣2013；岩本2014；上野2015・2018）。

その上で筆者は、弥生時代後期～終末期における中国鏡の流入・流通形態について、北部九州を流入・流通窓口として瀬戸内以東に拡散するあり方を検討している（辻田2014・2019）。詳細については後述するが、いわゆる楽浪系土器や半島系土器の出土のあり方、また鉄器や玉類などの流通形態の変遷（例：村上1998；久住2007；武末2009・2016；寺井2007；野島2009；谷澤2015・2020）と重ねつつ、北部九州を結節点とする形で人・ものが活発に移動するあり方の一環として中国鏡の流通を論じたものである。

以上のような研究動向においては、弥生時代後期～終末期に中国鏡をはじめとした舶載文物の流入窓口として北部九州地域が果たした役割の重要性が認識されてきた。その一方で、「北部九州」の中に含まれる諸地域はそれぞれに特色があることから、一括して考えることはできない。例えば久住猛雄氏が提唱する「原の辻－三雲貿易」から「博多湾貿易」へという変遷においては、朝鮮半島から対馬・壱岐・糸島地域・博多湾沿岸地域に至る地域間の関係性とそこでの比重が、弥生時代終末期から古墳時代前期前半にかけて推移していることが指摘されている（久住2007）。そうした観点から、これらの各地域の役割の違いを具体的に明らかにすることが課題ともいえる。

(2)　唐津湾沿岸地域における古墳時代開始前後の鏡をめぐる諸問題

こうした脈絡において、唐津湾沿岸地域を含む西北九州は、これらの「原の

辻－三雲貿易」から「博多湾貿易」へという交易ルートの西側にあって、かつ舶載文物の流入径路や鉄器生産遺跡の存在といった点からも、その位置づけが注目される地域である。ここでは、本地域の資料状況について検討したい。

唐津湾周辺は、宇木汲田遺跡における多鈕細文鏡の出現以来、弥生時代を通じて鏡の副葬が継続して行われる地域として知られている。ここでの調査・発見の歴史については、田島龍太氏の整理があるのでそちらを御参照いただきたいが（田島2020）、特に弥生時代後期以降に限定すると、以下のような論点が注目される。まず後期の王墓として位置づけられてきた桜馬場遺跡が2007年に再調査された結果、不明であった甕棺が出土した。これにより、桜馬場式の標識となる甕棺の形態的特徴が明確となった（蒲原2009b）。その結果、柳田康雄氏（1986）や高橋徹氏（1994）らによって想定されてきた、後期前半でも中頃に近い時期という年代観が概ね妥当であったことが検証された。こうした調査・研究の進展により、唐津湾沿岸地域では、後期前半～中頃にかけて、方格規矩四神鏡や内行花文鏡などの後漢鏡がもたらされ、地域集団の代表者の墓に副葬されるあり方が出現することがより明確となったのである。

古墳時代前期の遺跡については、後述する唐津市久里双水前方後円墳の1994年の調査により、中国製・後漢代の盤龍鏡１面が出土した。筆者自身、この盤龍鏡を検討する機会をいただいたが、そこではこの盤龍鏡の来歴をどのように考えるかが大きな課題となった（辻田2009a）。しかしながら、1990年代後半から2000年代前半にかけては、西北九州地域の特に弥生時代後期後半から終末期における資料が非常に限られていたため、この点の検討については、一定の留保が必要であった。その後、冒頭にも述べたように、西九州自動車道の建設に伴う佐賀県教育委員会・唐津市教育委員会による調査の進展によって、後述する唐津市中原遺跡や古園遺跡から弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけての鏡が多数出土したことにより、当該時期の唐津湾沿岸地域における鏡の変遷が具体的に明らかとなってきた。そうした成果をふまえ、唐津市周辺の古墳時代初頭前後の鏡を検討した小松譲氏は、中原遺跡出土の中国鏡が、本地域と楽浪郡域などとの独自交渉によりもたらされた可能性を指摘している（小松2013）。また古園遺跡

のST26古墳からは、２面の倭製鏡とともに舶載の八鳳鏡（夔鳳鏡）が出土しており、これについても久里双水古墳との時期的関係などが問題となる。こうした資料の増加により、上述の久里双水古墳出土の盤龍鏡などについても新たな観点による検討が可能になりつつあるというのが現状ということができる。

(3)　本稿の課題

以上、古墳時代開始期の鏡をめぐる問題および唐津湾周辺における調査・研究の動向について検討してきた。本稿が対象とする西北九州地域は、弥生時代後期後半までは大陸・朝鮮半島とのつながりが顕著な、いわば対外交流の結節点の一つであった地域であるが、古墳時代になると近畿地域を核とした広域的地域間関係の中で、いわば周辺地域へと急速に転換する地域でもある（辻田2019）。こうした動きの中で、唐津湾周辺の中国鏡の流入のあり方を考えた場合、どのような変遷として説明できるかという点は、古墳時代的な広域秩序の形成を考える上で重要なモデルケースとなる。例えば山陰地域などでは、弥生時代後期後半～終末期において完形中国鏡の副葬が殆どみられないことから、完形中国鏡の当該地域への流入が古墳時代以降である可能性が想定されている（辻田2007；岩本2014）。これに対し、本稿で扱う西北九州地域は、弥生時代後期から古墳時代前期を通じて各時期の中国鏡が出土していることから、中国鏡の流入形態が弥生時代以来一貫して連続したものであるのか、あるいはどこかの時点で変化するのかといった点の検討が可能である。そしてこの問題は、上述のような当該地域の周辺地域への転換過程をどのように説明するかという点とも重なってくる。こうした問題意識のもと、本稿では、唐津湾周辺における遺跡出土鏡の変遷について検討したい。

３．唐津湾周辺の弥生時代後期後半～古墳時代前期における鏡の変遷

(1)　唐津湾周辺における弥生時代後期後半～古墳時代前期における遺跡出土鏡の概観

表１は、唐津市および伊万里市における、弥生時代後期～古墳時代前期の遺

跡出土鏡を整理したものである。小松譲氏による集成（小松2013）および下垣仁志氏による集成と分類（下垣2016）にもとづき弥生時代後期～終末期前後と古墳時代前期とに大きく区分してまとめたものである。

全体を概観すると、まず弥生時代後期については、唐津市桜馬場遺跡に代表されるような、大型後漢鏡を副葬する時期（後期前葉～中葉）と、唐津市中原遺跡を中心として完形後漢鏡の破砕副葬が行われる時期（後期後葉～終末期前後）に区分することができる。古墳時代前期については、前期前半と前期後半に区分した場合、久里双水古墳が前期前半、経塚山古墳・谷口古墳・杢路寺古墳が前期後半に該当する。古園遺跡 ST26古墳は、後述するように前期中葉前後の年代を想定する。このうち前期後半の３基の古墳から出土しているのは、魏晋鏡と「仿製」三角縁神獣鏡であり、近畿地域の政治権力により贈与されたものと考えられる（辻田2007・2010）。

図１は唐津市周辺の拡大図であるが、唐津市西部の松浦川流域に桜馬場遺跡・中原遺跡・久里双水古墳・古園遺跡などが集中することが確認できる。久里双水古墳から見ると、中原遺跡や古園遺跡はいずれも半径２～３km 圏内に位置している。これに対し、前期後半に魏晋鏡や「仿製」三角縁神獣鏡が副葬される経塚山古墳や谷口古墳は、この図の右上に位置する鏡山を挟んで東側の玉島川流域に築造されており、弥生時代後期～古墳時代前期前半とは遺跡の分布を異にするという特徴がある（辻田2009a）。久里双水古墳と谷口古墳は直線距離で約９km 離れた位置にある。

以上の点をふまえた上で問題となるのは、近畿地域から鏡がもたらされるようになるのがどの段階であるのか、またそれ以前はどのような形での流入形態であったのか、という点である。あわせて本地域の特徴として挙げられる現象として、いわゆる破鏡の少なさ、また「舶載」三角縁神獣鏡の不在という点がある。いずれもあくまで「分布は現状」でしかないことは当然であるが、西北九州全体を見渡しても穿孔された破鏡などは殆どみられず、また例えば未盗掘の久里双水古墳において三角縁神獣鏡が副葬されていなかったという点はあらためて注目される。ここにおいて、前期前半の久里双水古墳出土鏡や古園遺跡

表１　唐津湾周辺地域出土鏡一覧（弥生時代後期～古墳時代前期）

No.	県名	番号	舶倭	鏡式	面径（cm）	出土遺跡	出土地名	遺跡の種類	時期
1	佐賀	148	舶	尚方作流雲文縁方格規矩四神鏡	23.2	桜馬場遺跡1号甕棺墓	唐津市桜馬場4丁目	墳墓	弥生後期
2	佐賀	149	舶	素縁方格規矩渦文鏡	15.4	桜馬場遺跡1号甕棺墓		墳墓	弥生後期
3	佐賀	150	舶	長宜子孫八弧内行花文鏡	18.5	桜馬場遺跡 SX-01表土層下位		墳墓	弥生後期
4	佐賀	194	舶	細線式獣帯鏡	破鏡か	午戻遺跡 SC005	伊万里市大坪町丙六仙寺字午戻・辻の前	墳墓	弥生後～末期
5	佐賀	195	舶	長宜子孫八弧内行花文鏡	19.7	午戻遺跡 SC010		墳墓	弥生後～末期
6	佐賀	138-1	舶	不明・破片	11.8	半田大園遺跡 C 区	唐津市半田字大園	集落	不明
7	佐賀	138-2	舶	不明・破片	8.4	天神ノ元遺跡遺物包含層	唐津市半田字神ノ元	墳墓	不明
8	佐賀	151	舶	不明・破片	17.9	神田堤遺跡（菜畑内田遺跡）遺物包含層	唐津市神田字堤	不明	不明
9	佐賀	151-1	倭	弥生小形倭製鏡（内行花文鏡）	7.0	菜畑内田遺跡1区4層	唐津市神田	集落	不明
10	佐賀	157-1	舶	内行花文鏡？	17.2	千々賀遺跡調査区北側谷部最奥部トレンチ	唐津市千々賀字千々賀	不明	不明
11	佐賀	187-1	舶	鋸歯文縁方格規矩鏡？	12.2（破鏡）	中原遺跡9-2区 O-27区画包含層	唐津市原字溜ノ内・西ノ畑	集落	不明
12	佐賀	187-4	舶	内行花文鏡	20.7	中原遺跡 ST13414墳丘墓		墳墓	弥生後～末期
13	佐賀	187-5	舶	長宜子孫八弧内行花文鏡〈1号鏡〉	17.5	中原遺跡 ST13415墳丘墓		墳墓	弥生後～末期
14	佐賀	187-6	舶	長宜子孫八弧内行花文鏡〈2号鏡〉	19.0	中原遺跡 ST13415墳丘墓		墳墓	弥生後～末期
15	佐賀	187-7	舶	鋸歯文縁方格規矩八禽鏡〈3号鏡〉	18.1	中原遺跡 ST13415墳丘墓周溝内埋葬施設		墳墓	弥生後～末期
16	佐賀	187-2	舶	上方作浮彫式獣帯鏡	11.1	中原遺跡 SP13231木棺墓		墳墓	弥生末期～古墳初頭
17	佐賀	187-3	舶	弥生小形倭製鏡（七弧内行花文鏡）	7.8	中原遺跡 SP13418木棺墓		墳墓	弥生後～末期
18	佐賀	187-8	舶	上方作浮彫式獣帯鏡	12.4	中原遺跡11区 Y-41・42区画検出面		集落	不明
19	佐賀	187-9	舶？	不明・鈕片	不明	中原遺跡12区 SH12035竪穴住居2層		集落	弥生
20	佐賀	189	倭	重圏文鏡	5.0	佐志中通遺跡	唐津市佐志字中通	集落	中世
21	佐賀	187	舶	盤龍鏡	12.2	久里双水古墳	唐津市双水字サコ2776-1	古墳	古墳前期
22	佐賀	157-2	舶	八鳳鏡	11.4	古園遺跡 ST26古墳 SC01石棺	唐津市千々賀字古園	古墳	古墳前期
23	佐賀	157-3	倭	四獣鏡	9.4	古園遺跡 ST26古墳 SP02石棺	唐津市千々賀字古園	古墳	古墳前期
24	佐賀	157-4	倭	珠文鏡	6.5	古園遺跡 ST26古墳 SC05石棺	唐津市千々賀字古園	古墳	古墳前期
25	佐賀	116	舶	方格 T 字鏡	14.8	経塚山古墳	唐津市浜玉町渕上字荷石	古墳	古墳前期
26	佐賀	117	舶	「仿製」三角縁獣文帯三神三獣鏡	21.6	谷口古墳〔西主体部（第2主体部）〕	唐津市浜玉町谷口字立中	古墳	古墳前期
27	佐賀	118	舶	「仿製」三角縁獣文帯三神三獣鏡	21.6	谷口古墳〔西主体部（第2主体部）〕		古墳	古墳前期
28	佐賀	119	舶	「仿製」三角縁獣文帯三神三獣鏡	21.6	谷口古墳〔東主体部（第1主体部）〕		古墳	古墳前期
29	佐賀	120	舶	「仿製」三角縁吾作三神三獣鏡	21.0	谷口古墳〔東主体部（第1主体部）〕		古墳	古墳前期
30	佐賀	121	舶	双頭龍文鏡	8.3	谷口古墳〔東主体部（第1主体部）〕		古墳	古墳前期
31	佐賀	122	倭	捩文鏡	8.1	谷口古墳〔東主体部（第1主体部）〕		古墳	古墳前期
32	佐賀	123	倭	捩文鏡	7.2	谷口古墳〔東主体部（第1主体部）〕		古墳	古墳前期
33	佐賀	166	舶	「仿製」三角縁獣文帯三神三獣鏡	22.3	杢路寺古墳〔第1主体部〕	伊万里市二里町大里甲字平沢良	古墳	古墳前期

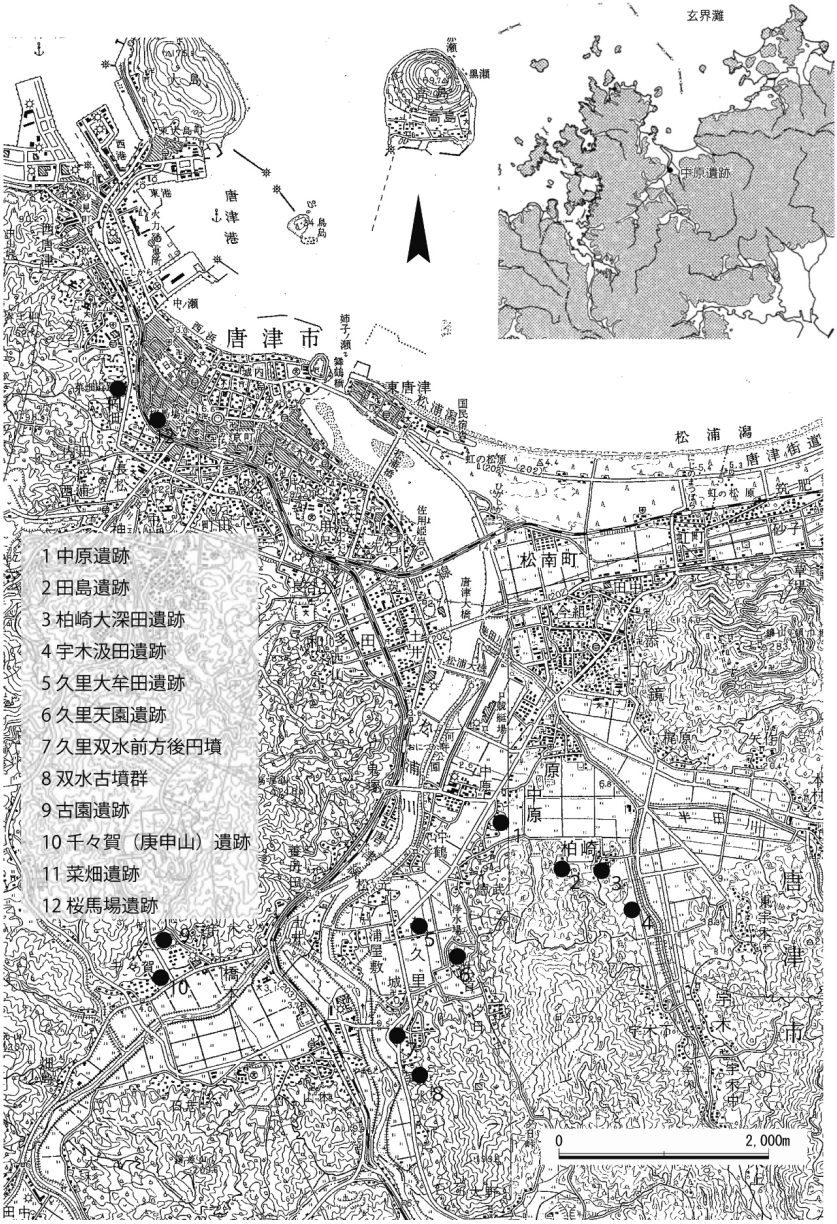

図１　唐津湾沿岸地域の遺跡分布

ST26古墳出土鏡の来歴が問題となり、また中原遺跡における弥生時代終末期前後の副葬事例の位置づけが重要な課題となってくる。以下、この３つの遺跡から出土した鏡群について個別に検討を行い、その上で本地域における鏡の流入・流通形態の変遷について考えてみたい。

(2)　中原遺跡出土鏡群

前述のように、西九州自動車道建設に伴い調査された複合遺跡であり、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墳墓や鍛冶関連遺物などが多数検出されている（佐賀県教育委員会編2012・2013・2015）。墳丘墓や木棺墓は11～13区に集中する（図２）。弥生時代中～後期の集落域は、谷状地形を挟んでこの南側に隣接した地点に展開したものと想定されている。弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけての鍛冶関連遺物は、11～13区および東側に隣接した９・10区で出土している。ここでは弥生時代後期後葉～終末期前後に集中する11～13区の墳墓での鏡副葬事例について検討したい。

当該期の鏡が出土した遺構としては、ST13414墳丘墓・ST13415墳丘墓（およびその周溝内埋葬施設）・SP13231木棺墓・SP13418木棺墓が該当する。このうちSP13231木棺墓はST13415墳丘墓の周溝東南側に隣接して構築されている。またSP13418木棺墓はST13414墳丘墓とST13415墳丘墓の中間に位置しており、いずれも調査区の西北部に集中した地点での出土といえる（図２）。ST13414墳丘墓の規模は南北16m・東西12.8m、ST13415墳丘墓は南北10m・東西11mでいずれも南東側周溝中央に陸橋部を持つ方形墳丘墓である（図３）。また古墳時代初頭以降に墓域が東側に拡大し、全長26mの前方後円墳ST12032などが検出されているが、主体部が削平によって失われていることなどもあり、鏡の出土は確認されていない（隣接する弥生時代のSH12035竪穴住居址では鈕片が出土している）。

ST13414墳丘墓およびST13415墳丘墓で出土した鏡はいずれも四葉座内行花文鏡や方格規矩四神鏡（八禽鏡）などの後漢鏡で、破砕副葬されているという特徴がある（図４・５・表１）。またこれらの鏡の面径は17.5～20.7cmと中型～大型に属するもので、この時期の副葬事例としては北部九州の中でも大型の副

図２　唐津市中原遺跡11～13区遺構配置図

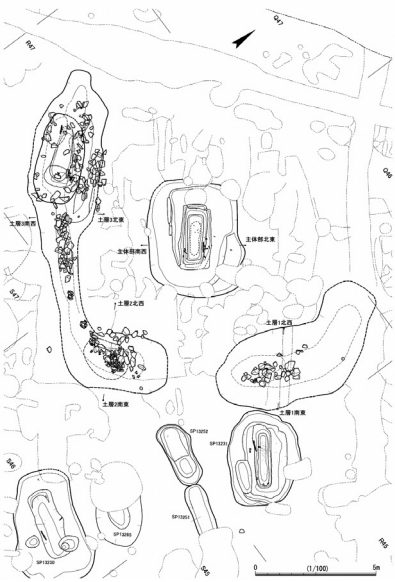

図３　中原遺跡 ST13415墳丘墓

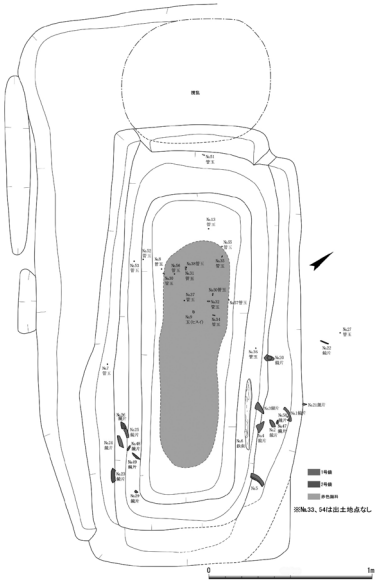

図４　中原遺跡 ST13415墳丘墓主体部

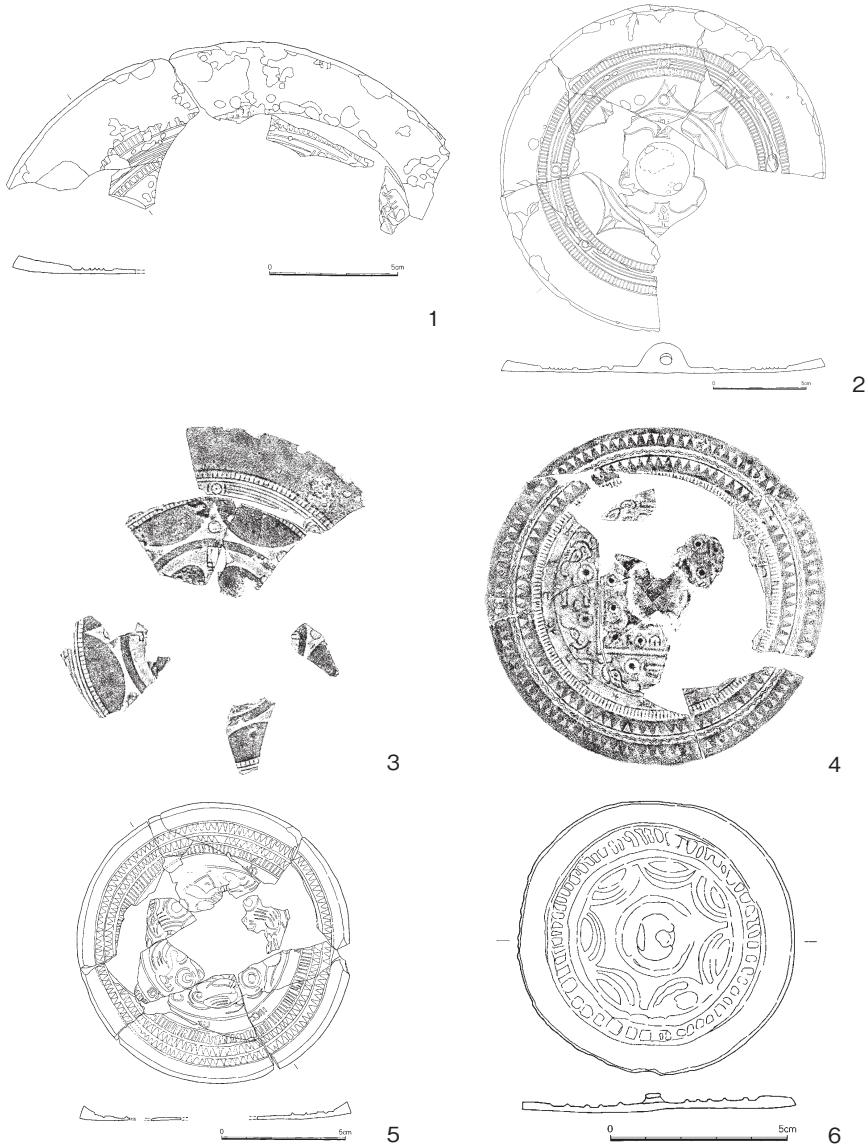

図５　唐津市中原遺跡出土鏡群（縮尺不統一）

１：ST13414墳丘墓出土内行花文鏡（20.7cm）、２：ST13415墳丘墓出土１号鏡（内行花文鏡・17.5cm）、３：同２号鏡（内行花文鏡・19.0cm）、４：同３号鏡（周溝内埋葬出土、方格規矩八禽鏡・18.1cm）、５：SP13231木棺墓出土上方作系獣帯鏡（12.4cm）、６：SP13418木棺墓出土弥生小形倭製鏡（7.8cm）

葬鏡群といえる。内行花文鏡・方格規矩八禽鏡のいずれも文様が不鮮明であり、殊にST13415墳丘墓の周溝内埋葬から出土した方格規矩四神鏡（八禽鏡）は、鋳肌を残した状態で文様が不鮮明であることから、いわゆる「踏み返し鏡」の可能性が想定されてきた一群に該当する（柳田2002；南2019）。筆者は、これらが元来文様が不鮮明な製品で、かつ弥生時代後期後葉～終末期前後に西日本規模で広く流通し、破砕副葬が行われるという特徴が共通することから、「粗製鏡群」と呼んでこの時期に特徴的な一群と考えている（辻田2019）。近隣地域では、福岡県糸島市の井原ヤリミゾ遺跡出土鏡で同様の鏡の出土状況が認められる。製作年代についても、製作技術から後漢代の後半期以降に位置づけられるものと考える。また四葉座内行花文鏡については、花文間に大きな円文を入れる点などの特徴が、伊万里市午戌遺跡出土鏡などとも共通することから、これらが一括入手されたものである可能性が指摘されている（森下2020）。

他方、木棺墓から出土した２面のうち、１面はいわゆる弥生時代小形仿製鏡（高倉洋彰氏分類〔1990〕のⅡｂ式、田尻義了氏分類〔2012〕のⅢａ式）であり、小型鏡として扱われ、副葬された事例とみられる。もう１面の上方作系浮彫式獣帯鏡は、ST13415墳丘墓に隣接するSP13231木棺墓で破砕副葬されたものである。この鏡は、實盛良彦氏（2015）の分類でいう「四像Ⅱ式・Ⅰｂ系」に該当し、三国初期（220～240年頃）に位置づけられている。また本木棺墓の出土土器は「惣座１式」／久住猛雄氏編年の「ⅠＡ式」とされる（久住2019）。本鏡は、破砕副葬ながら元来は完形であったと考えられる。上方作系浮彫式獣帯鏡は、従来岡村秀典氏（1992・1999）により漢鏡７期第１段階の鏡（２世紀後半）として、その時期に流通したと考えられてきた鏡式であるが、本遺跡出土鏡からみた完形鏡の流入・副葬の上限という点では弥生時代終末期に定点があると考えられる（ただし完形鏡の大半は前期古墳に副葬されることから、古墳時代前期にも列島への流入が継続したことが想定される）。

以上の点から、中原遺跡で出土した鏡は、いずれも後漢後半～三国初期に属するものであり、出土遺構の時期からも弥生時代後期後葉～古墳時代初頭前後に本地域にもたらされ、副葬された事例と考えることができよう。

(3)　久里双水古墳出土盤龍鏡

久里双水古墳は全長約90mの前方後円墳であり、舟形状の粘土床をもつ竪穴式石槨を主体部とする。出土土器や竪穴式石槨の構造などから布留１式前後の築造年代が想定されている（蒲原2009；唐津市教育委員会編2009；辻田2009b）。この主体部から、舶載の盤龍鏡１面と碧玉製管玉２点、鉄製刀子１点が出土している。

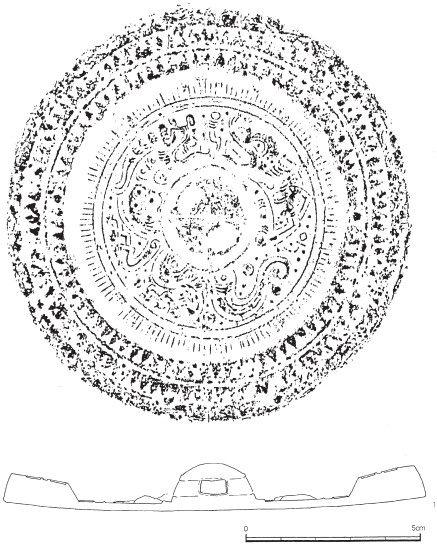

図６　唐津市久里双水古墳出土盤龍鏡

盤龍鏡は直径12.15cmであり、岡村秀典氏分類（1993）のＩＢ式、上野祥史氏分類（2003）の型式１B、筆者分類（辻田2009a）のＢ類（BⅡ類）に該当する（図６）。筆者は、円文を伴う芝草文をもち、これらが２世紀代の画象鏡に多くみられること、主像文様で龍の足が一本省略されること、一段高い位置にやや大きめの長方形の鈕孔をもつこと、上野氏の型式１Ｂが長江中流域からいわゆる徐州地域、楽浪郡域などで分布することに注目した。その上で、製作年代の上限を画象鏡や上方作系浮彫式獣帯鏡の出現年代を前後する時期、下限を長方形の鈕孔を有する三角縁画象鏡などの製作時期と捉え、製作地として楽浪郡域を含む華北東部地域を想定した（辻田2009a）。

岡村氏は、久里双水鏡と同様の特徴をもつ盤龍鏡について、後漢鏡の銘文に関する検討にもとづき、漢鏡５期から６期にかけて尚方から自立した「淮派」の製作によるものと想定している（岡村2010）。氏はさらに、この淮派の一部が移動して河北省交河県付近の「成平」で製作した一群が渤海を越えて東方の楽浪郡や列島にもたらされたとする解釈を提示している（岡村2011）。

上記のように製作年代や製作地については微妙に見解が異なるものの、久里

双水古墳出土鏡のような一群が、芝草文を有する画象鏡と接点を持ちつつ、２世紀代を前後する時期に華北東部地域で製作されたものと理解する点は共通しており、この点を定点として以下議論を進めたい。

本鏡の来歴について、筆者は、①製作地からの直接入手および②近畿地域（ヤマト政権）からの間接入手という大きく２つの可能性を想定した（辻田2009a）。ただ日本列島から出土する中国製の完形盤龍鏡については、福岡県徳永川ノ上遺跡の出土事例（弥生時代終末期～古墳時代初頭）を除くと、弥生時代遺跡から出土した事例が殆ど知られておらず、大半が前期古墳から出土したものであること、また前期古墳出土盤龍鏡が岡村氏の漢鏡５期に該当するような「古い」文様構成をもつ一群（筆者分類のＡ類）を主体とすること、さらに魏の年号鏡である「景初四年」銘の鏡（240年：京都府広峯15号墳・伝宮崎県持田古墳群出土）が出土していることなどが他の鏡式との違いとして挙げられる。以上から筆者は、盤龍鏡については基本的に古墳時代初頭以降に近畿地域に流入したものが各地に拡散したものである可能性を想定している（辻田2001・2007）。その後、新潟県胎内市の城の山古墳から出土した盤龍鏡について、三国代の製品で近畿地域から贈与されたものとする解釈が提示されている（上野2016）。こうした点もふまえるならば、久里双水古墳出土の盤龍鏡についても上述②の可能性が高いものと考えられる。破砕副葬でなく完形副葬である点や、北部九州で稀少な前期前半代における竪穴式石槨の採用（辻田2009b）といった点などからも、古墳時代的な鏡副葬への転換という脈絡で考えるのが妥当であろう。

(4)　古園遺跡 ST26古墳出土鏡群

当遺跡は、西九州自動車道の唐津市と伊万里市を結ぶ道路建設に伴い、2008年に調査が行われた。近隣の千々賀遺跡からも内行花文鏡の出土が知られている。遺跡は松浦川を挟んで久里双水古墳の西の対岸、標高46.8m、比高差42m の丘陵東端部に位置しており、久里双水古墳を見通すことができる。ST26古墳は、東西径12.5m・南北径13m の楕円形墳と復元されている。墳丘上からは SC01箱式石棺墓・SP02木棺墓・SC05箱式石棺墓の３基の主体部が検出されており、そ

れぞれから１面ずつ鏡が出土している（佐賀県教育委員会2013：図7-1）。以下、各資料について検討したい。

SC01箱式石棺墓は本古墳の中心的埋葬施設とみられ、面径11.4cmの舶載八鳳鏡（夔鳳鏡）が出土した（図7-2）。本鏡については、出土状況から破砕副葬された可能性が想定されている。八鳳鏡は十字糸巻形と四葉文の鈕座を持ち、４組の相対する鳳凰文が配され、周囲に16弧の連弧文と凹帯がめぐる。岡内三眞氏分類（1996）のⅢAa1式、秋山進午氏分類（1998）による２A式、岡村秀典氏分類（2012）の凹帯A式に該当し、岡村氏のいう廣漢系鏡群に位置づけられる。岡村氏はこの鏡について、鈕座の特徴から中国陝西省付近で２世紀第３四半期に製作されたという見解を提示している（佐賀県教育委員会2013：p.65）。なお本鏡はいわゆる横長の長方形鈕孔を伴っている。

八鳳鏡は弥生時代から古墳時代にかけて出土事例が知られるが、弥生時代後期の資料は数が少なく、分布が九州に偏るのに対し、古墳時代前期以降の資料は近畿を中心として広く分布することから、前期古墳出土鏡については古墳時代以降に列島に流入したものである可能性が高い（辻田2001・2007；岩本2019）。製作地・系譜や年代観からも、弥生時代後期後半段階に直接大陸から本地域にもたらされたというよりは、他の前期古墳出土後漢鏡の多くと同様に、古墳時代初頭以降に近畿地域に流入した後に各地に拡散したものと考えられる。ST01出土鏡についてもこうした脈絡で理解することができよう。

SP02木棺墓からは、面径9.4cmの倭製獣像鏡が出土している（図7-3）。本鏡については、出土状況から元来は完形であったものと考えられている。本鏡は、連珠文の鈕座を持ち、内区を４つの乳で区画した上で、外区側に頸部が長く伸びた頭部をもつ４体の獣像を配置し、空間を突線で充填するもので、内区外周には櫛歯文と素文縁がめぐる。

本鏡の類例として、奈良県黒石山古墳出土鏡（図8-1：15.6cm）・岐阜県龍門寺12号墳出土鏡（12.1cm）・新潟県保内三王山11号墳出土鏡（図8-2：11.3cm）などがある。冨田和気夫氏は、保内三王山11号墳鏡の獣像頭部表現について、鼉龍鏡系の頭部表現と比較しつつ、前期後半段階のものと位置づけている（冨田

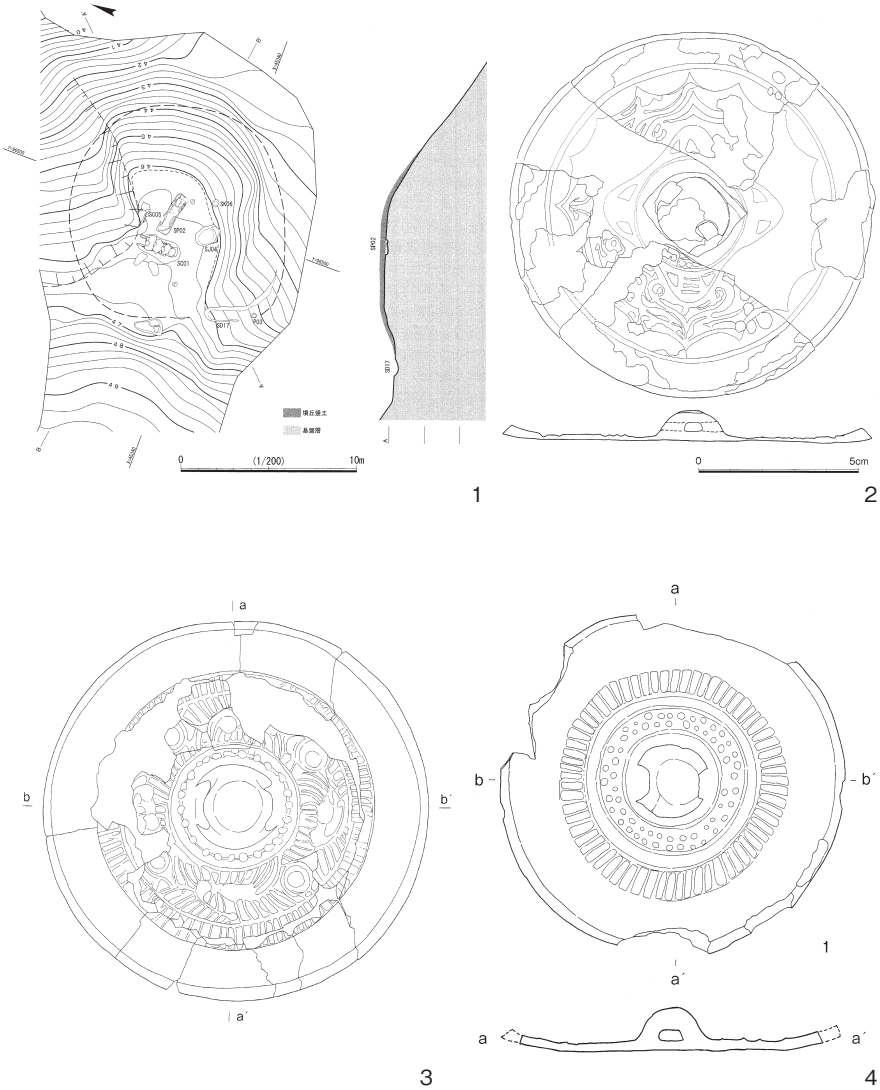

図７　唐津市古園遺跡 ST26古墳と出土鏡

１：ST26古墳墳丘測量図、２：SC01箱式石棺墓出土八鳳鏡（11.4cm）、３：SP02木棺墓出土四獣鏡（9.4cm）、４：SC05箱式石棺墓出土珠文鏡（6.5cm）

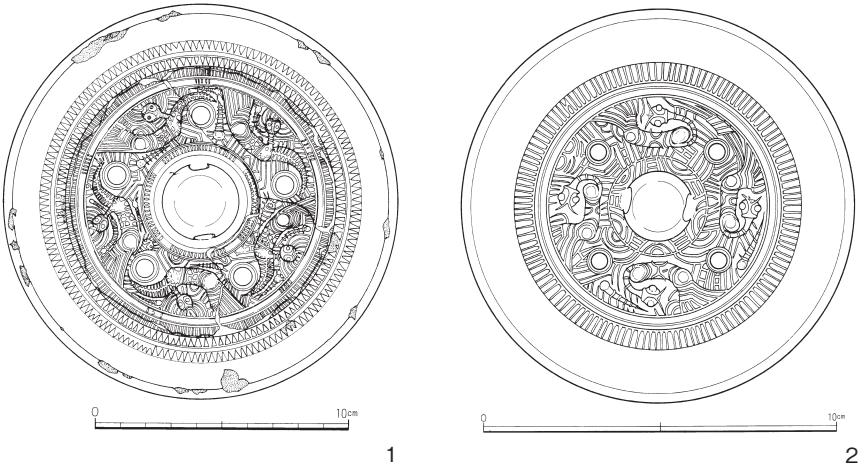

図８　古園遺跡 ST26古墳 SP02出土四獣鏡の類例

１：奈良県黒石山古墳出土（15.6cm）、２：新潟県保内三王山11号墳出土（11.3cm）

1989）。これらは下垣仁志氏が獣像鏡Ⅱ系と分類する一群で、氏は段階設定可能であるとしながら変異差の可能性も含めて時期差であるかどうかの判断を保留している（下垣2003・2011）。古園 ST26古墳・SP02鏡については、氏の獣像鏡Ⅱ系との関連性を想定しながら、氏の「前期中段階」と位置づけている（下垣2016）。黒石山古墳鏡は５分割、保内三王山古墳鏡は４分割であり、外区の構成や内区主像からも古園鏡は保内三王山古墳鏡に近く、文様がやや簡略化されたものと位置づけることができる。ただし、下垣氏も指摘するように、氏の獣像鏡Ⅱ系の資料数が全体としても10面前後と少なく、その中でも黒石山古墳鏡・保内三王山11号墳鏡・古園鏡は非常に類似性が高いことから、近接した時期に製作された中型鏡と小型鏡という可能性も考えられる（龍門寺12号墳鏡は、主像の頭部が内区側に伸びる点で上記３面とはやや異なる様相を示している）。いずれにせよ、現状では製作年代について前期中葉以前に遡らせる積極的な根拠はないことから、ここでは前期中葉前後の製作年代を考えておきたい。

SC05箱式石棺墓からは、面径6.5cm の珠文鏡が出土している（図7-4）。本鏡も、出土状況から元来は完形鏡として副葬されていたものと考えられている。

内区は２列の珠文がめぐり、その周囲に二条の突線と櫛歯文、素文の外区が配される。脇山佳奈氏分類（2013）の D-B 類・岩本崇氏分類（2016）の列状系・中井歩氏分類（2018）の珠文鏡 A 群に該当する。本鏡の鈕孔形態は長方形であり、中井氏の A 群の特徴と合致することから、製作年代は古墳時代初頭前後と考えることができる。鼉龍鏡系をはじめとした、古墳時代前期倭製鏡の中心的系列群の出現以前に近畿地域で製作された一群と考えられる（中井2018）。

以上の検討結果を整理するならば、古園 ST26古墳の３基の埋葬施設から出土した鏡は、後漢鏡１面（八鳳鏡）・倭製鏡２面（珠文鏡・獣像鏡）で、いずれも12cm 以下の小型鏡であること、うち八鳳鏡については破砕副葬と考えられる。古墳の築造時期に伴うと考えられる土器は出土しておらず、共伴する副葬品も SC01 の不明刀子状鉄製品１点と SP02 のガラス小玉４点・不明棒状鉄製品１点に限られる。前期古墳の複数の埋葬施設において鏡が副葬される場合、同時期に入手されたものが「分有」された後に副葬される事例が多いことから、最も製作年代が新しい獣像鏡が一つの参照点となる。ここでは上記の獣像鏡の年代観にもとづき、ひとまず前期中葉前後の築造と考えておきたい。

(5)　小結

以上、中原遺跡・久里双水古墳・古園 ST26古墳とそれ以降の唐津湾沿岸地域における鏡の変遷について具体的に検討を行ってきた。この結果、中原遺跡と久里双水古墳・古園 ST26古墳との間で副葬鏡の種類や年代観に違いがみられることが明らかとなった。この点をふまえ、弥生時代後期後半～古墳時代前期における本地域への鏡の流入形態および副葬の変遷について考えてみたい。

４．考察：唐津湾周辺における対外交渉の変遷とその画期

(1)　弥生時代後期後半～終末期における対外交渉の具体相

西北九州地域では、弥生時代後期前葉～中葉前後に、桜馬場遺跡において大型の後漢鏡を副葬する墓地が出現する。これは福岡県糸島市の井原鑓溝遺跡や

福岡市飯氏馬場遺跡など、玄界灘沿岸地域で広く共通した現象の一環である。これらは楽浪郡を介して北部九州と中国王朝との交渉が行われた結果と解される。福岡平野における様相が若干不明確であるものの、各遺跡での鏡の種類や型式にあまり違いがないことから、各地域集団による個別の対外交渉というよりは、糸島地域などを対外的代表者とする形での、地域同士での同列的なつながりにもとづく対外交渉であった可能性が想定される。

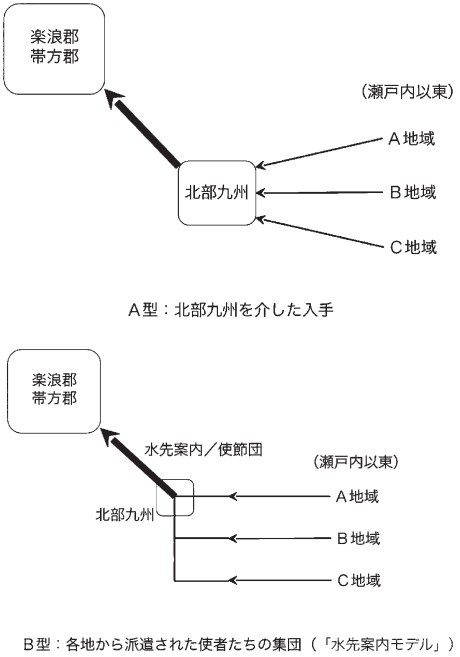

図９　弥生時代後期後半における北部九州を結節点とした鏡流入形態の模式図（辻田2019）

これに対し、弥生時代後期後半以降になると、後漢鏡の分布が瀬戸内以東まで含めて広く拡散するとともに、破砕副葬についてもあわせて広く行われるようになる。こうした瀬戸内以東への拡散のあり方について、筆者は、大きく二つの可能性を想定してきた。一つは、瀬戸内以東の各地から人が集まり北部九州の諸集団から鏡を入手する場合であり（図９上）、もう一つは、瀬戸内以東の各地から派遣された人々が、北部九州の海人集団などを水先案内人として楽浪郡・帯方郡などに赴き鏡を入手した後、地元に持ち帰る場合である（図９下）。筆者はこれを「水先案内モデル」と呼称している（辻田2014・2019）。

こうした点から考えた場合、中原遺跡を含めた唐津湾沿岸地域における鏡副葬のあり方は、楽浪郡・帯方郡などからもたらされた可能性が高い点において、本地域が壱岐・対馬を経て朝鮮半島・楽浪郡・帯方郡に至る海上交通の起点の１つであり、また本地域の集団が上述のような水先案内の役割を果たす海人集

団としても活動したその結果であると考えることもできよう。先に挙げた中原遺跡・午戌遺跡における内行花文鏡の類似性が一括流入の可能性を示すという点（森下2020）についても、そうした対外交流の実態の一端を示しているものと考えられる。それが唐津湾沿岸地域の集団のみによる独自の対外交渉による流入・入手といえるかどうかについては判断が難しいが、中原遺跡の墓域における糸島系土器の使用（小松2012）や、楽浪系土器が対馬・壱岐・糸島地域以東で多くみられるのに対し、唐津湾周辺で稀少であること（cf. 武末2009・2016；寺井2007；宮本2020）などからみて、糸島地域との関係の中での対外的交流窓口の一部という性格が相対的につよかった可能性も考えられる。また中原遺跡で出土した鍛冶関連遺物は、周辺地域に鉄器が供給されていた可能性を示している（土屋2014；村上2014；立谷2017；唐津市末盧館2020）。これについては西北九州地域の独自のあり方とともに、広い意味では壱岐や博多湾沿岸の各遺跡における鉄器生産・流通の「ネットワーク」の一部として理解できるものと考える。

なお、中原遺跡 SP13231 木棺墓からは上方作系浮彫式獣帯鏡が出土しているが、弥生時代終末期の九州での出土事例としては他に中原遺跡の11区の検出面から出土した外区片、また福岡県みやこ町小長川遺跡の方形周溝墓の例などがある。後者は久住猛雄氏のⅠA期新相で庄内式古相と並行するという（久住2019）。またもう1面、長崎県平戸市の「田助古墳」出土鏡（樋口・釣田1951；唐津市末盧館2020）が知られている。六像式で破砕副葬の可能性がある資料で、復元径約15.4㎝である。箱式石棺からの出土であるが、共伴した玉類の構成については、弥生時代後期後半の脈絡での位置づけがなされている（谷澤2020、玉類については谷澤亜里氏から御教示をいただいた）。これら以外の完形鏡もしくは破砕副葬の事例の大半は、古墳時代初頭前後もしくはそれ以降の墳墓に副葬されるもので、中部瀬戸内から近畿周辺に分布が集中している。中原遺跡の SP13231 の事例については、他の後漢鏡と同様に弥生時代後期後半以降の脈絡で本地域にもたらされた後、より小型の中国鏡として墳丘外の木棺墓に副葬されているというあり方である。この点からは、中原遺跡出土鏡については、古

墳時代初頭前後やそれ以降におけるより広域での上方作系浮彫式獣帯鏡の流通の直前段階の様相として理解できるものと考える。

この問題と関連して糸島地域に目を向ければ、平原遺跡出土鏡群以降、弥生時代終末期の後半段階（古墳時代初頭以前）においては、３世紀前半代に製作されたことが確実な鏡式（例：上方作系浮彫式獣帯鏡や飛禽鏡、画象鏡など）の出土が現状で殆どみられない点が注意される（糸島市津和崎権現古墳出土の画象鏡は、簡略化された文様の特徴と長方形鈕孔を伴うことから三国代以降の作とみられ、古墳時代初頭以降に本地域にもたらされたものと考えている）。対照的に周防灘沿岸地域などの東九州地域や瀬戸内以東の一部などでこれらの鏡種が副葬事例として出土していることから、現状では、そうした鏡の入手や流通に関して糸島地域が主体的に関与した形跡は認められない。こうした現象は、列島各地の地域集団による独自の動きを示す可能性もあるが、筆者は、むしろ鏡の流通や差配そのものに対する糸島地域の関心の低さを示す可能性とともに、このことが、大型墳丘墓造営への関心の低さとも重なりつつ、古墳時代初頭前後に対外交流窓口が近畿地域へと転換したことの間接的な要因となった可能性を想定している（この場合の「直接的」要因としては、大型墳丘墓造営と鏡の両者を重視した東部瀬戸内から近畿地域周辺の社会が、対外交流窓口の近畿地域への転換をより積極的に求めた、という点が考えられる〔辻田2019：pp.368-371〕）。

以上のように、中原遺跡出土鏡群のあり方から考えた場合、弥生時代後期後半～終末期において、海人集団を擁する唐津湾沿岸地域は、糸島地域や福岡平野をはじめとする広域の地域間のネットワークに属しつつ、対外交流窓口の一部として位置づけられる地域であった、とする理解が可能であろう。

(2)　古墳時代前期における地域間関係の変遷とその画期

古墳時代になると、中原遺跡でも、前述のように後期後半～終末期の墳墓群に隣接する墓域で全長26m の前方後円墳（ST12032）の築造が行われている。破壊されているため主体部等の詳細は不明であるが、周溝内から石棺墓・土器棺墓が出土している。築造時期は久里双水古墳と大きくは違いがないものと考え

られており（蒲原2009a）、同一遺跡の墓域の中で、連続した墳墓造営が行われている点でも重要である。

そして、そうした小型の前方後円墳の築造と並行して独立丘陵上に全長約90mの前方後円墳である久里双水古墳が築造される。この古墳は、いくつかの点で弥生時代終末期までのあり方とは不連続な特徴が認められる。一つは、北部九州でも稀少な竪穴式石槨を採用していること、そしてもう一つは北部九州でもそれまで殆ど入手されたことのない、完形の盤龍鏡を副葬していること、である。後者についても、ここでは前述の検討結果にもとづき近畿地域からの入手と捉える。これらの点は、弥生時代後期以来の在地的伝統やその延長上では説明できず、端的にいえば外来の要素であり、それは瀬戸内から近畿地域周辺に由来するものであるということができる。こうした久里双水古墳の要素が持つ「外部性」は、墳丘上に近畿系や東四国系などの多様な系譜を持つ外来系土器群が供献されること（蒲原2009a）とも調和的であり、唐津湾沿岸の地域社会が中・東部瀬戸内から近畿地域の文化要素をより積極的に導入しつつ、大型モニュメントの造営を行ったことを示している。唐津湾周辺のように、中国鏡がリアルタイムで継続的に流入した地域においても、古墳時代初頭以降にいわば流入の経路が大きく変化したとみられる点に、古墳時代への転換とその画期が認められよう。「原の辻－三雲貿易」から「博多湾貿易」への転換（久住2007）とも、時期としてはほぼ一致していることも、この時期の前後に対外交流において糸島地域が果たした役割が変化しつつあったことを示す点で重要である。

また久里双水古墳の90m級の前方後円墳という墳丘規模は、独立丘陵上の築造とはいえ、苅田町石塚山古墳（130m）を除くと北部九州でも最大級であり、同時期の糸島地域・福岡平野周辺でこれに比肩しうる規模の前方後円墳は、糸島市泊大塚古墳・福岡市那珂八幡古墳・筑紫野市原口古墳などに限定される。こうした墳丘規模の大型化という点もまた、弥生時代以来の文化伝統では説明できないものである。久里双水古墳の墳丘規格は、福岡平野周辺とも異なることが指摘されている（岡田2009）。上述の竪穴式石槨の採用についても、特徴的な舟形状の粘土床（および舟形の木棺）とあわせて、糸島地域や福岡平野とも

異なる独自の導入であり（辻田2009b）、ここにおいて本地域のより自律的な動きを読み取ることもできよう。北部九州の各地域集団が、近畿地域との関係においてそれぞれに独自の動きをみせるようになることと、冒頭でも述べた北部九州地域の「周辺地域」化という点が連動しているものと考えられるのである。また90m 級の前方後円墳でありながら三角縁神獣鏡が副葬されていなかった点は、そうした自律的なあり方が容認されつつも、朝鮮半島にほど近い本地域の在地社会の発展を促進させることについて、近畿地域の政治権力の側がそれほど積極的ではなかったことを窺わせる。いわば本地域の集団が広域的な秩序の中で「牽制」された形と考えることができる。

そのこととも直接的に関連するかは現時点で不明であるが、久里双水古墳のような大型前方後円墳の築造は本地域では継続しなかったようである。先の中原遺跡 ST12032前方後円墳や、久里双水古墳に近接して築造された双水柴山２号墳（34.7m の前方後円墳、主体部：箱式石棺）などにみられるように、本地域では小規模な墳丘墓の築造という点が文化伝統として存在していたものと考えられる。先に挙げた古園遺跡 ST26古墳は、築造時期が必ずしも明確ではないが、仮に前述のように獣像鏡の年代観をもとに前期中葉前後と考えた場合、久里双水古墳に後続して築造された古墳と位置づけられる。ST26古墳から出土した鏡は、八鳳鏡も含め、いずれも近畿地域から入手されたものと想定される。この点では久里双水古墳の盤龍鏡と同様の来歴と考えられるが、他方で ST26古墳は大型前方後円墳としては築造されず、また埋葬施設も在来の箱式石棺墓・木棺墓が用いられている。さらに、この３面のうち唯一の中国鏡である八鳳鏡についてのみ、弥生時代後期以来の破砕副葬が行われていることからすれば、ST26古墳の築造は、いわば在来の文化伝統の連続性あるいはそれへの回帰を示すものであり、逆にいえば久里双水古墳のような90m級の大型前方後円墳の築造の方が一時的・限定的な現象であったと考えることもできよう。

中原遺跡の鉄器生産は前期後半以降急速に衰退したものと想定されるが、これは福岡平野周辺における前期後半以降の博多湾貿易の衰退（久住2007）とも重なっている。古墳時代初頭～前期前半においては、近畿地域を中核とする形

で地域間のネットワークが再編され、その中に各地の地域社会も組み込まれたとみられるが、古墳に埋葬されるような上位層の世代交代に伴い、そうしたネットワークへの参加を更新するかどうかは地域社会の側の選択に委ねられていた。その中には、唐津湾沿岸地域のように、旧来的な墳墓造営へと回帰しつつ大型前方後円墳の造営を継続しなかった地域もあったとみることができよう。

なお、前期後半になると、唐津湾沿岸地域でも玉島川流域で経塚山古墳が築造され、竪穴式石槨を採用し、魏晋鏡を副葬するなど再び近畿地域とのつながりをつよめるようになる。前期末に構築された谷口古墳は90m 級の前方後円墳であり、長持形石棺を採用して「仿製」三角縁神獣鏡を多数副葬することは、そうしたつながりが発展したことを示している。そして谷口古墳の埋葬施設が初期横穴式石室の初現型式であることからすれば、福岡市の老司古墳や鋤崎古墳と同様に、朝鮮半島との関係においてそうしたあり方が出現したものと考えられる。４世紀代における東アジア情勢の変動の中で、朝鮮半島への窓口の１つとして再び本地域の役割が重視されるようになったことがその背景として想定されよう。

５．結語

以上、本稿では、唐津湾沿岸地域の鏡出土遺跡とその内容の検討を通じて、弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけて、特に古墳時代初頭前後、また古墳時代前期後半を画期としながら、対外交流のあり方が大きく変化したことを論じてきた。具体的には、弥生時代後期後半～終末期における対外交流窓口の一部としてのあり方から、古墳時代前期前半に近畿地域とのつながりがつよくなりつつ、近畿地域を中核とした地域間関係の展開の中で急速に「周辺地域」に位置づけられるようになり、前期後半にはそれ以前とはまた別の形で対朝鮮半島の交流窓口としての役割が期待されるようになったものと考えた。本地域は、弥生時代から古墳時代前期におけるこうした対外交流や地域社会の対応の時期的変遷について、墳墓出土資料にもとづき具体的に跡づけることができる点で

も重要な研究対象地域である。課題としては集落遺跡の様相という点が挙げられるが、この点も含めて引き続き検討を進めたいと考えている。

【謝辞】

本稿は、2020年12月19日に唐津市で開催された講演会で発表した内容にもとづくものである。発表の準備に際しては、以下に御芳名を掲げる皆様に大変お世話になりました。記して深く感謝申し上げます。

唐津市末盧館、佐賀県文化財調査研究資料室、小松譲、立谷聡明、谷澤亜里、寺田正剛、仁田坂聡、濱口尚美、美浦雄二、村上恭通、吉本健一（五十音順、敬称略）

【参考文献】

秋山進午　1998 「夔鳳鏡について」『考古学雑誌』84-1.

伊都国歴史博物館編　2020 『濵山海居末盧国』，伊都国歴史博物館.

岩本崇　2014 「北近畿・山陰における古墳の出現」『博古研究』48.

岩本崇　2016 「五條猫塚古墳出土の珠文鏡と古墳時代銅鏡生産の画期」『五條猫塚古墳の研究』総括編，奈良国立博物館.

岩本崇　2019 「伯耆国分寺古墳に副葬された鏡の履歴」『伯耆国分寺古墳の研究』，島根大学法文学部考古学研究室.

岩永省三　2010 「弥生時代における首長層の成長と墳丘墓の発達」『九州大学総合研究博物館研究報告』８.

上野祥史　2003 「盤龍鏡の諸系列」『国立歴史民俗博物館研究報告』100.

上野祥史　2015 「鏡からみた卑弥呼の支配」『卑弥呼 ── 卑弥呼創出の現象学 ──』，大阪府立弥生文化博物館.

上野祥史　2016 「城の山古墳出土の盤龍鏡」『城の山古墳発掘調査報告書』，胎内市教育委員会.

上野祥史　2018 「古墳時代における鏡の分配と保有」『国立歴史民俗博物館研究報告』211.

岡崎敬編　1982 『末盧国』，六興出版.

岡田裕之　2009 「久里双水古墳の墳丘形態と前期古墳の中での意義」『久里双水古墳』，唐津市文化財調査報告書第95集.

岡村秀典　1992 「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る』，出雲考古学研究会.

岡村秀典　1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』55.

岡村秀典　1999 『三角縁神獣鏡の時代』，吉川弘文館.

岡村秀典　2010 「漢鏡５期における淮派の成立」『東方學報』85.

岡村秀典　2011 「後漢鏡銘の研究」『東方學報』86.

岡村秀典　2012 「後漢鏡における淮派と呉派」『東方學報』87.
岡内三眞　1996 「双鳳八爵文鏡」『東北アジアの考古学第二（槿域）』.
蒲原宏行　2009a 「久里双水古墳出土古式土師器の位置付け」『久里双水古墳』，唐津市文化財調査報告書第95集.
蒲原宏行　2009b 「桜馬場「宝器内蔵甕棺」の相対年代」『地域の考古学』，佐田茂先生論文集刊行会.
唐津市教育委員会編　2009 『久里双水古墳』，唐津市文化財調査報告書第95集.
唐津市末盧館編　2020 『末盧より『西』を望む ── 西九州航路の盛衰と鉄をめぐる動静 ──』，唐津市末盧館.
九州考古学会編　2013 『弥生時代後期青銅鏡を巡る諸問題』，九州考古学会.
久住猛雄　2007 「「博多湾貿易」の成立と解体 ── 古墳時代初頭前後の対外交易機構 ──」『考古学研究』53-4.
久住猛雄　2019 「二・三・四世紀の土器と鏡 ── 土器の併行関係と出土鏡からみた暦年代を中心として ──」實盛良彦編『銅鏡から読み解く２～４世紀の東アジア』，勉誠出版.
小松譲　2012 「中原遺跡古墳時代初頭前後の墳墓群の編年的位置づけ」『中原遺跡Ⅵ　12区・13区の古墳時代初頭前後の墳墓群の調査』，佐賀県文化財調査報告書第193集.
小松譲　2013 「唐津地域の弥生時代～古墳時代初頭の青銅鏡と遺構の併行関係」『弥生時代後期青銅鏡を巡る諸問題』，九州考古学会.
佐賀県教育委員会編　2012 『中原遺跡Ⅵ　12区・13区の古墳時代初頭前後の墳墓群の調査』，佐賀県文化財調査報告書第193集.
佐賀県教育委員会編　2013 『古園遺跡・千々賀遺跡・千田島Ⅱ遺跡』，佐賀県文化財調査報告書第200集.
佐賀県教育委員会編　2014 『中原遺跡Ⅷ　９区・10区の調査と鍛冶関連遺物』，佐賀県文化財調査報告書第203集.
佐賀県教育委員会編　2015 『中原遺跡Ⅸ　13区南側低地部・14区の調査』，佐賀県文化財調査報告書第208集.
下垣仁志　2003 「古墳時代前期倭製鏡の編年」『古文化談叢』49.
下垣仁志　2011 『古墳時代の王権構造』，吉川弘文館.
下垣仁志　2013 「青銅器からみた古墳時代成立過程」『新資料で問う古墳時代成立過程とその意義』，考古学研究会関西例会.
下垣仁志　2016 『日本列島出土鏡集成』，同成社.
實盛良彦　2015 「上方作系浮彫式獣帯鏡と四乳飛禽鏡の製作と意義」『FUSUS』７.
實盛良彦編　2019 『銅鏡から読み解く２～４世紀の東アジア』，勉誠出版.
高倉洋彰　1990 『日本金属器出現期の研究』，学生社.
高橋徹　1994 「桜馬場遺跡および井原鑓溝遺跡の研究 ── 国産青銅器，出土中国鏡の型式学的検討をふまえて ──」『古文化談叢』32.
武末純一　2009「三韓と倭の交流 ── 海村の視点から ──」『国立歴史民俗博物館研究報告』

151.
武末純一　2016 「日本列島の楽浪系土器概観」『原の辻遺跡　総集編Ⅱ』，長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集.
田島龍太　2020 「末盧国の時代 ── 桜馬場遺跡から久里双水古墳まで ── 」伊都国歴史博物館編『濵山海居　末盧国』，伊都国歴史博物館.
田尻義了　2012 『弥生時代の青銅器生産体制』，九州大学出版会.
立谷聡明　2017 「弥生時代素環刀の地域性とその背景」『古文化談叢』79.
谷澤亜里　2015 「古墳時代開始期前後における玉類の舶載」『物質文化』95.
谷澤亜里　2020 『玉類からみた古墳時代の開始と社会変革』，同成社.
辻田淳一郎　2001 「古墳時代開始期における中国鏡の流通形態とその画期」『古文化談叢』46.
辻田淳一郎　2005 「破鏡の伝世と副葬 ── 穿孔事例の観察から ── 」『史淵』142.
辻田淳一郎　2007 『鏡と初期ヤマト政権』，すいれん舎.
辻田淳一郎　2009a 「久里双水古墳出土盤龍鏡の諸問題」『久里双水古墳』，唐津市文化財調査報告書第95集.
辻田淳一郎　2009b 「北部九州における竪穴式石槨の出現」『史淵』146.
辻田淳一郎　2010 「北部九州の前期古墳における竪穴式石槨と葬送儀礼」『史淵』147.
辻田淳一郎　2014 「鏡からみた古墳時代の地域間関係とその変遷 ── 九州出土資料を中心として ── 」『古墳時代の地域間交流２』，九州前方後円墳研究会.
辻田淳一郎　2019 『鏡の古代史』，角川選書.
土屋了介　2014 「中原遺跡出土鉄製品・鉄片に関するまとめ」『中原遺跡Ⅷ　９区・10区の調査と鍛冶関連遺物』，佐賀県文化財調査報告書第203集.
寺井誠　2007 「日本列島出土楽浪系土器についての基礎的研究」『古文化談叢』56.
冨田和気夫　1989 「11号墳出土四獣鏡をめぐる諸問題」『保内三王山古墳群　測量・発掘調査報告書』，三条市教育委員会.
中井歩　2018 「古墳時代前期における小型鏡の系譜と変遷」『埼玉県立史跡の博物館紀要』11.
野島永　2009 『初期国家形成過程の鉄器文化』，雄山閣.
樋口隆康・釣田正哉　1951 「平戸の先史文化」『平戸学術調査報告』，京都大学平戸学術調査団.
福永伸哉　1996 「舶載三角縁神獣鏡の製作年代」『待兼山論叢』30，史学篇.
福永伸哉　2005 『三角縁神獣鏡の研究』，大阪大学出版会.
福永伸哉・岡村秀典・岸本直文・車崎正彦・小山田宏一・森下章司　2003 『シンポジウム三角縁神獣鏡』，学生社.
北條芳隆・溝口孝司・村上恭通　2000 『古墳時代像を見なおす』，青木書店.
南健太郎　2019 『東アジアの銅鏡と弥生社会』，同成社.
宮本一夫　2020 「遼東・山東系土器と楽浪系土器からみた弥生時代後半期の国際関係」『史

淵』157.
村上恭通　1998 『倭人と鉄の考古学』，青木書店.
村上恭通　2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』，青木書店.
村上恭通　2014 「中原遺跡出土の鉄製品・鉄素材・鉄塊について」『中原遺跡Ⅷ　９区・10区の調査と鍛冶関連遺物』，佐賀県文化財調査報告書第203集.
森下章司　1998 「古墳時代前期の年代試論」『古代』105.
森下章司　2020 「古墳出土鏡研究の展開」『季刊考古学』153，雄山閣.
柳田康雄　1986 「青銅器の創作と終焉」『九州考古学』60.
柳田康雄　2002 「摩滅鏡と踏返し鏡」『九州歴史資料館研究論集』27.
脇山佳奈　2013 「珠文鏡の研究」『史学研究』279.

【挿図出典】

表１：下垣（2016）・小松（2013）をもとに筆者作成。図１～４：佐賀県教育委員会編（2012）、図６：唐津市教育委員会編（2009）、図７・８：佐賀県教育委員会編（2013）、図９：冨田（1989）、図10：辻田（2019）より改変引用。